

## 神郡 宇敬 氏

Ukyou Kamigori  
書道家



## 松永 エリック・匡史

Masanobu Eric Matsunaga  
ONE NATION Digital&Media株式会社  
代表取締役CEO / Producer



### デザインもクリエイティブも 基礎があって初めて成り立つ

松永 クリエイティブの世界を飛び越えて、ビジネス全般で「デザイン思考」が叫ばれています。さまざまな業界がデザインのメソドロジーを取り入れる中で、「デザインは右脳の発想」という定義がよく挙げられていますが、私はこれにすごく違和感があります。その理由は、言葉自体の意味はさておき、デザインやクリエイティブというものは、基礎や一定のセオリーなどがなくとも直感やフィーリングで行うものといったニュアンスで、この言葉が使われるケースが

多いように見受けられるからです。  
神郡 基礎をないがしろにするということは、むしろデザインやクリエイティブの否定にもつながってしまいますよね。書道の世界には何千年も前の中国から連綿と受け継がれている古典があって、全ての書道を志す者はまずは古典を練習します。その後に行書や楷書など書の分野ごとに分かれてそれぞれの道を進むわけですが、そうした中でも古典は一生欠かさずに練習し続けるものなのです。書道家にとって古典というのは骨格のような存在で、骨格ができて初めて自分なりの肉を付けていくことができるわけです。そして、骨格が



できてからも、常に鍛錬して追求し続けなければ、骨は弱くなり、形もいびつになってしまうでしょう。

**松永** 「骨格」というのはぴったりの例えですね。私は楽器を三歳の頃からそれこそ泣きながらやらされてきたのですが、やがて少年となってそろそろ自分はここを越えたいなという思いが強まっていた頃、何かを発見してしまったような感じで、自分ならではの音楽の世界の広がりが見えた瞬間がありました。基礎というのは短調な練習の繰り返しでとても苦痛でしたが、その土台があって初めてクリエイティブが成り立つのだという事実を実感できた瞬間だったのかもしれない。

ビジネスにしても同様で、音楽家からコンサルタントという全く毛色の異なる仕事へと変わったわけですが、コンサルティングの世界にしても、全てのメソッドをしっかりと身に付けてからでなければ、自分なりのクリエイティブなど発揮できませんでした。

**神郡** 茶道や武道、歌舞伎など、日本の稽古事の世界には「守破離」という思想

があります。この言葉は、まずはその世界にある型を「守る」ことから修行を始め、その後、型が身についたら既存の型を「破り」自分なりの型を創造し、最終的には型から「離れ」て自在の境地に達するということを意味しています。つまり、型があるからこそ、それを破ることができるわけで、基礎が伴わない「型無し」などではないということなのです。

**松永** 私の場合は西洋音楽の世界でしたが「守破離」の意味するところ、よく分かります。基礎を習得する際、最初のうちはどうしてもやらされている感じがあるものですが、ある瞬間に基礎の意味が理解できるようになる。そうやってこそ、次に自分が何かをつくり出すことができるのでしょうか。

**神郡** 同じ基礎でも、習得をし続けていくにつれて見え方が全然違ってきますから。ただの単純作業だと思っていた動作一つ一つにも、さまざまな発見ができて、そこから楽しくなっていく。それこそがイノベーションではないでしょうか。私自身、書道はまだまだ道半ばで、今もいろいろな発見があって楽しくて

仕方ありません。だからこそ、続けられているのだと考えています。

### イノベーションは ゼロからは生まれない

**松永** 「イノベーション」という非常に重要なキーワードをいただきましたが、先ほどのデザイン思考やクリエイティブ同様に、この言葉の世間での使われ方に疑問を抱いています。何というかイノベーションというのが、何もないところからパッと生まれてくるように叫ばれていて、ともすれば過去に築いてきたものを全否定しているような感があるのです。しかし実際はそうであるわけがありません。これまで数十年にわたって多くの技術者や研究者などが積み重ねてきたナレッジやテクノロジーがベースにあるからこそ、その上にイノベーションが創出されるはずですよ。

私がプロデュースした、デザインセンターも、デジタルテクノロジーによるイノベーションを創出することを目的としています。ここで言うイノ

ベーションというのは決してゼロから生まれてくるようなものではありません。デザインセンターのオープニングアクトを神郡さんと音楽家の松武秀樹さんをお願いさせていただいたのも、どちらも気の遠くなるであろう鍛錬の末に書道の世界、音楽の世界それぞれでイノベーションを起こした人物であるからです。**神郡** 話をいただいた時は、正直戸惑いました。書というのは基本的に平面に筆を走らせるのですが、垂直な壁に書いてほしいというのですから。どんなふうに墨が飛び散ってしまうのか想像もつきませんし、他にも心配な要素がたくさんありました。しかし松永さんから、ジャズのジャムセッションのようにその時にしかできない「書」を描いてくれればそれでいいからと言われたので、快諾したのです。

**松永** 私の方は、何が起きるか分からないと聞いて心の中で快哉を叫んでいましたから（笑）。それでこそ、デザインセンターのオープニングにふさわしいのです。先が読めない、誰もやったことのないことをやってしまうから面白いし、意義があります。もし墨が飛び散っても、それが揺るぎない基礎の上に立つ神郡さんの芸術であるわけですし。私は書道家や音楽家だからお二人に頼んだわけではなく、人間を見て、この人ならばきっとワクワクするようなジャムセッションになると確信してお願いしました。デザインセンターの基本的な発想が「ジャム」であるのも、意志を持った人間が集まれば、何かが生まれる場になるという狙いがあります。

### デジタル＝テクノロジーではない

**松永** デザインセンターのオープニングアクトをお願いしたもう一つの理由に、お二方ともにアナログの世界のクリエイターだというのがあります。私はデジタル＝イノベーションではないと考えていますし、デジタルもまた単にテクノロジーを意味するものではないでしょう。デザインセンターにおけるデジタルとは、新しいクリエイティブな問題解決であり、ユニークな顧客視点に立ったカスタマーエクスペリエンスの構築であり、企業や社会のイノベーションを加速することを意味するのです。

**神郡** 書道に欠かせない墨はまさにアナログですが、私は墨の出現自体がとんでもないイノベーションだと思っています。古代の中国には木簡という墨で文字が書かれた板が普及していたのですが、何千年前の木簡が今も数多く残っていて、それらの内容をちゃんと



読むことができます。現在の技術を駆使したインクでも、これだけの長時間の間にはインクが流れてしまうそうです。最初にできた「インク」である墨が、最新のものよりもある点で優れていて、今も使われているというのはすごいことですよね。古いと思われているものが実は一番新しくったりするわけで、「温故知新」という言葉の奥深さを感じますね。**松永** 新しいものを使っていると、ある時から古いものが欲しくなるということって多いですよ。例えばソフトウェアに電子楽器が入っているスマートフォンもありますが、これを使い込んでいくとやがて本物が欲しくなるのです。モノからコトの時代と言われますが、本当に心を込めてサービスをつくっていると、最後はモノに戻るのだと信じています。

**神郡** どの世界であってもある域を突破したようなすごいと思う人はいますが、そうした人たちは皆、歴史や伝統を大事にし、またリスペクトしていると感じますね。

**松永** まさにそのとおりで、私にとっては神郡さんも歴史を重んじる人であり尊敬しています。本当の意味でのデザイン思考やクリエイティブ、そしてイノベーションについてお話をいただきました。ありがとうございました。